

政府に報告された市内発見の古墳

—『埋蔵物録』にみる松江の近代考古学—

渡辺貞幸

はじめに

明治以来戦前まで東京国立博物館（以下、東博と表記）の前身博物館は、今日謂う所の埋蔵文化財行政の中心的役割を担っていた。1877年（明治10）に内務省は、開墾や工事等で発見される埋蔵物のうちには「古代ノ沿革ヲ徵スルモノ」もあるので、一応当省に届け出て検査を受けるよう布達し、届け出の際には「堀出地名及ヒ形状等ヲ詳記シ及ヒ模写スルモノ」を提出することを各県に求めた⁽¹⁾。そして、内務省で検査の上、国として保存する必要があると認められるものは購入して、内務省の博物館（東博の前身）で収蔵することとしたのである。

博物館の所管はその後、農商務省、さらに宮内省へと移ったが、この方針は1899年（明治32）の遺失物法に受け継がれた。そして同年の内務大臣訓令によって、「古墳関係品其ノ他学術技芸若ハ考古ノ資料トナルヘキモノ」の発見に係る情報は、宮内省の帝国博物館つまり東博の前身博物館に集中させる体制が整えられたのである⁽²⁾。

全国の各道府県から寄せられた情報とそれへの対応に関する厖大な記録は、『埋蔵物録』として整理・保管され、今日に至っている。これは担当省や博物館側の行政意図だけでなく、上申した地方官吏（文書番号から起案が警察署だったと推定できるものが多い）の埋蔵文化財に対する問題意識を知る上でもまことに重要な近代史資料であり、時枝務氏によって総合的検討もなされている⁽³⁾。

筆者はかつて、東博の客員研究員としてこの資料を閲覧する機会を得、松江市内の資料についても調査したことがあるので、以下、その概略を紹介して若干のコメントと注釈を加えたい。記載は『埋蔵物録』の年代順で、各項の（）内は、文書中での地名表記である。県からの上申はすべて県令・知事名で出され、宛先は所管の卿・大臣である。また、文書に添付された略図類については、参考までに必要部分の影印版を示す。古い資料のため見にくくなっているものや一連の図などについては、画像ソフト上で最小限の加工をしたり接合したりしたものがあることに留意されたい。「」内は文書中の原文を（明らかな誤字もそのまま）示すが、漢字を新字体に改めたりプライバシーに配慮したりの改変をした。

なお、東博の資料に関しては、本村豪章氏が作られた目録（以下、本村目録）があり⁽⁴⁾、収蔵されている考古資料については目録（以下、収蔵品目録）が刊行されている⁽⁵⁾。また、特に須恵器については『須恵器集成』（以下、集成）として図が公開されていて⁽⁶⁾、そのうち松江市内の出土品は既刊の『松江市史』〈史料編2・考古資料〉（以下、市史）に他の資料も加えて再録されている⁽⁷⁾。市史では主要遺跡の紹介もされているので、適宜、これらを参照することとする。

1. 玉湯町布志名（意宇郡布志名村字山崎）の発見品（本村目録83）

○発見日 不記載。1885年（明治18）8月26日付で島根県令から農務卿宛に上申されているので、発見日はそれ以前。

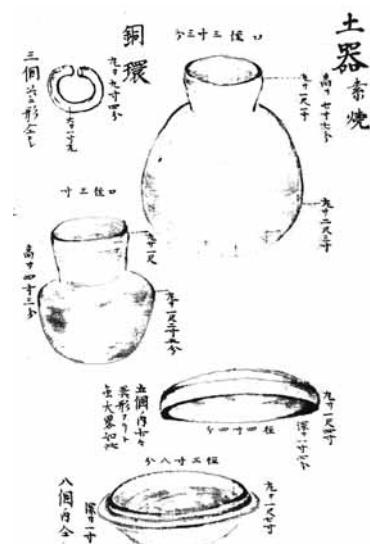


図1

○発見状況 道路改修のため山林掘削中に、銅環と須恵器を発見。

○発見品 添付の図（図1）によれば、銅環3、須恵器（壺1、長頸壺1、蓋5、坏8）。

○対応 「差出ニ不及事」と指令。

○コメント 現松江市域で最初に上申された遺物発見報告である。発見品の図は比較的リアルで、寸法等が詳しく記載されているが、本村目録の出土品数と異なる。県の遺跡目録や遺跡地図に見える山崎横穴墓群の一角であろうか。

2. 八雲町西岩坂（意宇郡岩坂村大字西岩坂字岩屋口）・岩屋口横穴墓群（本村目録92）

○発見日 1892年（明治25）7月20日・8月19日

○発見状況 土砂採取の際洞穴8個を発見。ただし、「近傍ニ昔時ノ発見ニ係ル洞穴一個アリ從来之レヲ神代ノ穴ト称セリ」とあり、横穴墓は全部で9穴あった。このとき発見されたのは図2-2および3の「第二」～「第九」の洞穴である。なお、添付書類には出土品の略図（図2-1）、「発掘場所略図」（図2-2）、および個々の横穴墓の略図（図2-3）があり、特に1と3には寸法等が詳しく書き込まれている。

○発見品 刀4（「全長ハ二尺二分乃至二尺六寸」）、須恵器21（添付の略図によれば、提瓶1、壺1、壺1、脚付短頸壺1、蓋1、高台付坏1、横瓶（？）1、長頸壺4、坏11。このうち蓋は脚付短頸壺の付属品と扱われた）、金環2（「内径ハ五分ニシテ全体ニ点々金泊附着ス」）、人骨数個。

○対応 須恵器のうち3個（図2-1のうち、丁、戊、および辛のうち完全なもの1個）を帝国博物館へ差し出すよう指令。後、買い上げ。なお、丁は蓋とセットになっているため、博物館は都合4個の須恵器を購入したことになる。

○コメント この報告は図面を多用し、大変詳しい。東博に収蔵された4個の須恵器は、集成、市史に実測図がある。この横穴墓群はその後も破壊が進んだ⁽⁸⁾が、ここで報告された横穴墓と現状との関係等は不明である。

ところで、この発見に対応

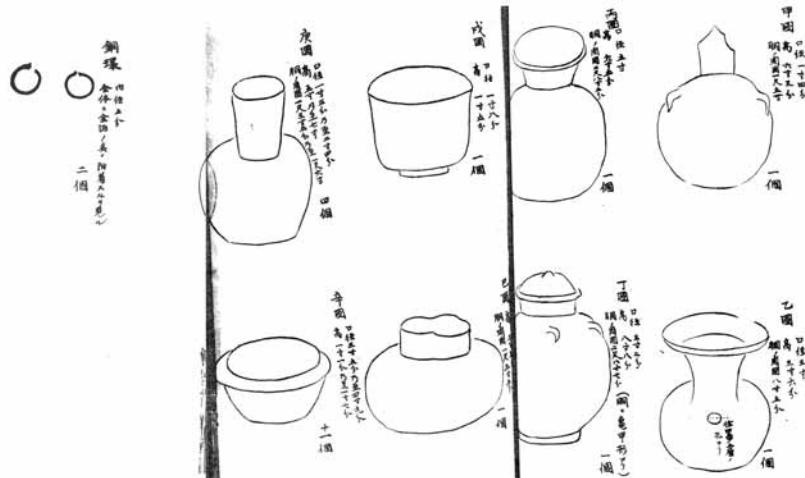


図2-1

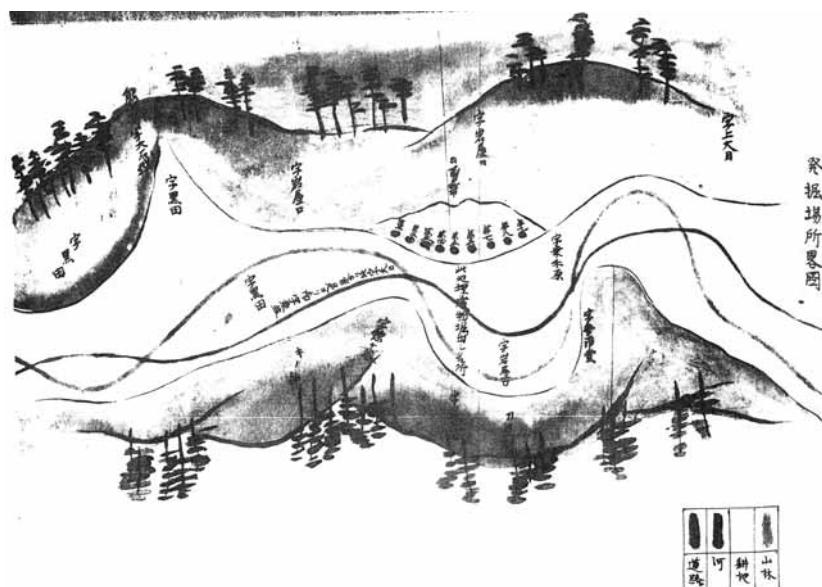


図2-2

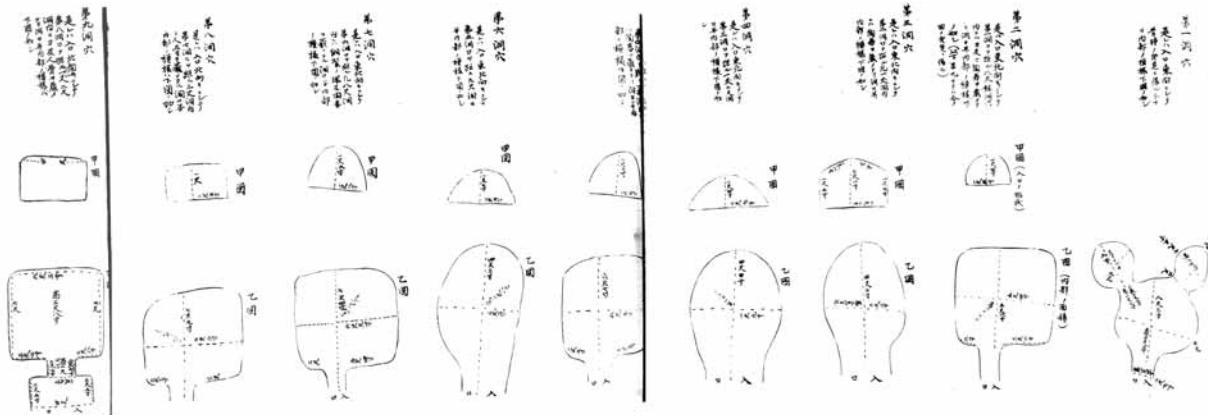


図2-3

する新聞記事が、山陰新聞の同年8月5日付にある。市史にも紹介されているが、それには「…山林の裾にして村道を距ること凡そ五間田地を隔つること凡そ二間の洞窟に石を積み且つ土を堆積せし所あり或る日某々等土を取らんために何心なく掘り穿ち邪魔なる石を運搬し去れハ顕ハれたる奇しき穴、ハテ何の為に設けしものかと内部に探り入りたるに古き陶器数個を得ける是に於て某々等ハ好奇心に駆られて再び近傍を堀り始めたるに同形の窟ありけれハ此由を村民に告げ勇を鼓して此所か彼所かと鍬を入れしに終に七個の穴を発見するに至れり…」と詳しく述べ、石積みの閉塞だったことも推定できる。ただし、県からの上申と合致しない点もある。記事の末尾は「右は素より古代の人種が住居せし所なるハ疑ふべくもあらず此他尚ほ幾十の遺跡の発見せられざるものあらんかと通信者ハ報ぜり而して其壺の一小片を本社に寄せしが其色ハ鼠色にて内部ハ魚鱗の如く外面は縦横線あり殆んど同色の布を以て包めるが如し」となっている。横穴は先住民の穴居跡と考えるのが一般的な時代だった。

3. 八幡町（意宇郡竹矢村大字八幡）・八幡宮下横穴墓群（本村目録12）

○発見日 1893年（明治26）8月3日

○発見状況 平浜八幡宮神官から、所有地「山林内ノ土ヲ堀取ラントセシ際一ノ洞穴アリ別紙略図ノ如キ陶器を藏ムルヲ発見セリ」との届けがあった。入口は高さ3尺3寸、幅2尺2寸。奥行1間2尺余、内幅1間4尺4寸余、高さ5尺5寸余。6・7間離れたところにも同様の洞穴がある、とする。

○発見品 別紙（図3）

によると、壺1、堤瓶1、直口壺1、壺残欠1、蓋杯類11の須恵器計15個で、それぞれ寸法を詳記する。添付の図を見る限り、本村目録の出土品欄には誤記がある。

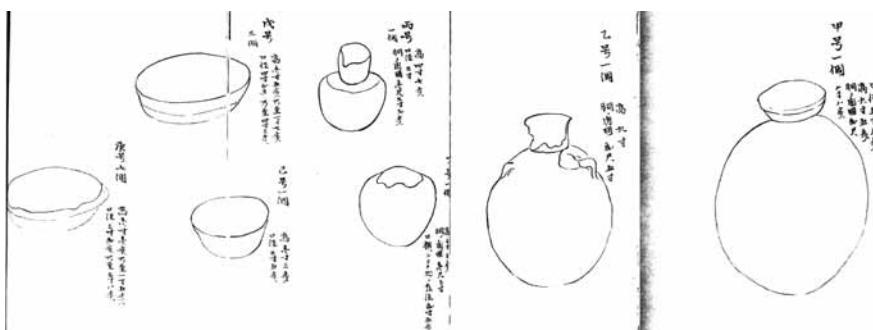


図3

○対応 「差出ニ及ハス」と指令。

○コメント 旧『島根県史』に「竹矢村大字八幡宮内 土器等」と記された横穴墓である。この横穴墓群については『東京人類学会雑誌』に往時を偲ばせる貴重な記事がある。情報を寄せたのは金田権太郎（後述）である。

出雲国八束郡元意宇郡八幡村八幡神社の入口同社神官青木氏邸内の山麓に北面して東より西に並びたる穴五個あり第二と第三は相連続せり第一第二第三共に奥行二間許高さは入口にて四尺位な

るも奥にては八尺位奥行並に幅も大概同様なり第四第五は殆んど埋れて入るを得ず第一は明治二十六年土中に埋もれ居りしを偶然堀りしに入口に石の一枚蓋ありしを除きしに穴ありしを以て地底を堀りしに祝部類五種総数十三個を得たりと云ふ他の穴よりは何も堀りしを聞かず…⁽⁹⁾

この記事の「第一」の穴こそ、この文書の横穴であろう。土器数が文書と異なるとはいえ、閉塞石の存在が確認できて興味深い。平浜八幡宮本殿の南側斜面に位置する八幡宮下横穴墓群については、近年、一部を市が調査した⁽¹⁰⁾が、その報文中に「宮司宅に保管してあった」須恵器の図が載っている。図3と比較してみると、そのうちの蓋坏の一部がこのときの出土品である可能性がある。

4. 奥谷町（松江市字奥谷）の横穴墓（本村目録4）

○発見日 1897年（明治30）3月17日

○発見状況 尋常中学校（県立松江北高等学校の前身）敷地開鑿中に発見。

○発見品 方1間半高さ3尺ばかりの「古穴」に、刀剣1（長さ2尺5寸）、須恵器（「蓋付皿様ノモノ」3、「壺様ノ破損シタルモノ」2）（図4）。

○対応 「差出スニ及ハス」と指令。

○コメント 漪滅した赤山横穴墓群の一部かと思われる。1901年の『東京人類学会雑誌』に「松江市北掘字赤山第一中学校敷地の北側に五個の横穴あり五年前校舎建築の際穴の中より鉄剣を得たり」⁽¹¹⁾とあるのは、この発見のことであろう。

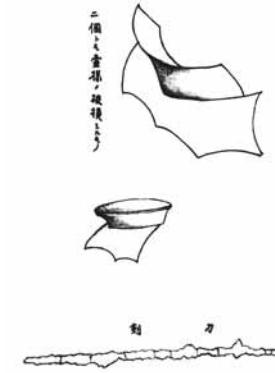


図4

5. 東出雲町揖屋（八束郡揖屋村字高江〈高井の誤記か〉）・高井横穴墓群（本村目録91）

○発見日 1900年（明治33）4月6日

○発見状況 「字高江山腹」で高さ8尺横1間半四方の洞穴中より発見。

○発見品 須恵器58、銅環4、曲玉2、長さ2尺5寸の腐朽した刀。

○対応 「悉皆当省帝国博物館へ差出スペシ」と指令。後、寄贈される。なお、腐朽した刀は廃棄されたらしい。

○コメント 記載の通りだとすると、かなり大型の横穴墓から大量の土器が出土したことになる。書類には出土品のスケッチ図（図5）が付いていて、絵は稚拙ながら提瓶を「茶壺ノ如シ」、壺を「湯コボシノ如シ」「砂糖壺ノ形」、高坏を「盃洗ノ形」などと、独自の表現を工夫している。須恵器58点の内訳は、博物館が県宛に出した受領書類では、茶壺形9、湯コボシ形1、花立形6、花立形1、コップ形1、皿形18、蓋形19、壺椀形1、壺形1、盃洗形1である。全点が博物館へ送致されたはずだが、受領書類と東博の収蔵品目録とで員数が合わない部分がある。須恵器が収蔵品目録で60個となっているのは、蓋がセット扱いになっていたためであろうか。4個送致された「銅環」は収蔵品目録では「金環二、銅環一」となっている。

出土須恵器は「高江山腹」出土品として集成、市史に実測図があり、東博で展示されていた優品を含む良好な一括資料である。ところが意外なことに、

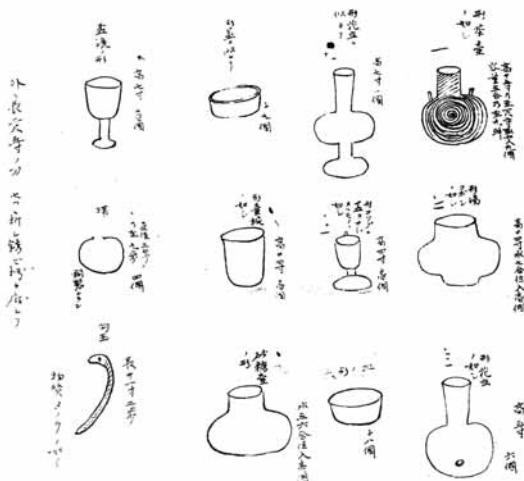


図5

「高江」の横穴墓というのは、遺跡として取り上げられたことがない。『東出雲町誌』^[12]にも同町の遺跡地図^[13]にも載っていない幻の遺跡である。ただし、「高江」ではなく「高井」という字名や「高井横穴群」なら存在する。そこで、「高井」が訛って「高江」と表記されたのではないかという（出雲弁ではありがちな）可能性が浮上する。高井横穴墓群の辺りは今は住宅団地になっているが、古い2.5万分の1地形図を調べると、確かにかつては低丘陵が延びていて、「山腹」と表現されるような地形があった。従って、「高江」は「高井」であり、この資料は高井横穴墓群の出土品であったという可能性はありそうである。さらに、この四半世紀後に刊行された旧『島根県史』を繙くと、「揖屋村字高江」の遺跡というのは記載がないが、「揖屋村字高井 曲玉提壺六角形壺隨刀劍耳環等」という記載があつて^[14]、「六角形壺」が解しかねる（短頸壺か）ものの、「高江」の出土品と通じる内容が記されている。つまり、著者野津左馬之助は東博に送られたこれらの遺物の出土地は「高井」であったと認識しているからしく、だとすれば、前記した推定は「蓋然性」よりも「確実性」を帯びたものと言って良いのではなかろうか（ただし、同書には「附図第五十九ノ一」「附図第五十九ノ二」として「八束郡揖屋村字高江山腹古墳発掘品」壺と隨の写真があり、これは東博所蔵品の写真と見て間違いない。しかしこれについては本文中のどこにも説明がないので、帝室博物館提供の写真を考証せずにそのまま載せたのではないかと疑われる）。

県知事名で出す公文書で地名の記載ミスが起こるのだろうかという疑問を持つ向きもあろうが、以下に紹介する諸例の中にも地名の誤記はいくつも認められる。なお、高井横穴墓群に関しては山本清考古資料の中に調査メモがあることを確認したが、東博収蔵資料についての言及はない。

6. 八雲町大石字高野(八束郡熊野村字タカノ)・高野横穴墓群(本村目録98)

○発見日 不記載。1902年(明治35)6月16日付の上申なので、それ以前。

○発見状況 熊野道路改修工事中に山畠にある洞穴中より発見。上申には略地図(図6-1)と土器の図(図6-2)が添えられている。

○発見品 図によると、須恵器の蓋杯4セット。

○対応 「差出ニ及バス」と指令。

○コメント 字名と添付の地図から、大石の高野横穴墓群と判断される。旧県史や『八雲村の遺跡』は、ここからかつて古剣類が出土していると伝えているが、それとは異なる横穴墓らしい。発掘された2号穴^[15]、それ以前から知られていた1号穴(刀剣類出土か)、そしてこの横穴墓、これらの位置関係等は不明である。

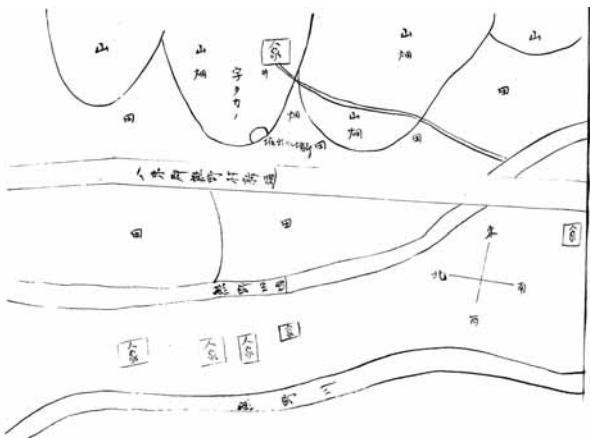


図6-1

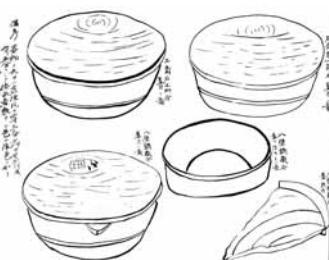


図6-2

7. 大草町(八束郡大庭村大字大草字岩屋後)・岩屋後古墳(本村目録3)

○発見日 1906年(明治39)4月21日・29日

○発見状況 畑耕地整理のため土砂掘り下げの際、地下3尺ぐらいの所から埴輪を発見。

○発見品 人物埴輪、円筒埴輪。

○対応 「悉皆当省東京帝室博物館へ差出スベシ」と指令。後、買い上げ。

○コメント 県からの報告には「人形模写図」と「発堀セル場所及地形略図」(図7)が付されている。地形略図は側面から見たスケッチで、石室左手の1間ほどの段差がある辺りで遺物が出土したと記している。後年、梅原末治はその地点を墳丘北西側と考証している⁽¹⁶⁾。石室主軸にほぼ直交するライン上である。なお、上申文書中には「日本考古図譜ヲ参照スルニ…」という記述があり、県担当者の勉強ぶりが窺えて面白い。有名な襷掛けの人物埴輪を含む資料であり、東博収蔵品の実測図は県の調査概報⁽¹⁷⁾で紹介され、市史でも405ページおよび724ページに紹介されている。

岩屋後古墳に関する記事で古いものに、山陰新聞1902年10月14日付に載った「大庭の史蹟」があり、「破損し且つ塵芥の土化したるものを以て埋められし石墳あり、蓋石半壊せり」と描出されている。この記事は考古学会の機関誌『考古界』に転載され⁽¹⁸⁾、斯界へのこの古墳の最初の紹介となった。執筆したのは同紙編集長の太田臺之丞(江南)で、「斯かる貴重なる史的遺物をさも厄介らしく僅々たる収穫の為めに抛置するは、所有者の不明を広告すると同時に大庭村の恥辱たり、敢て裝飾するを要せず唯ありのまゝに保存せは則ち足れり。由來大庭は史蹟の多きを以て昔時の都たるを証せらる、而かも其証憑遺物を以て誇るべきに却て之れを冷視するは何ぞや」と正論を吐いている。その三年半後にこの発見があった。



図7

8. 美保関町海崎（美保関村字海崎小字中峯山）・中峯山横穴墓（本村目録94）

○発見日 1906年(明治39) 6月7日

○発見状況 山麓開墾中に山腹が崩壊し、現れた大穴中より発見。

○発見品 須恵器6（添付の図〈図8〉によれば、提瓶1、壺2、把手付壺1、短頸壺1、高壺1）。

○対応 全点送付させ、後、買い上げ。

○コメント 土器6個が博物館に買上げられたが、東博には現在、4点の土器が収蔵されている。本村目録によると、壺1が台湾中学に移されたようだが、詳細は不明。もう1個あったはずの壺についても不明である。4点の土器の実測図は『美保関町誌』⁽¹⁹⁾および市史に載っている。遺跡は現在は確認できないという⁽²⁰⁾。

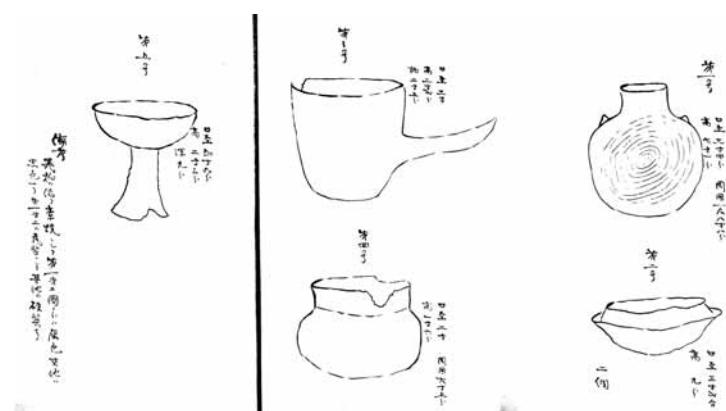


図8

9. 島根町野波（八束郡野波村大字野波字龜田）・龜田横穴墓群（本村目録93）

○発見日 1909年（明治42）4月11日・12日

○発見状況 土砂採取に際し、口径約1尺5寸、深さ1間半、幅約1間の半円形の洞穴を発見。

○発見品 瑪瑙曲玉4（赤色3、白色1）、須恵器18個（添付の図〈図9〉を参照すると、蓋壺類11、高壺2、提瓶2、直口壺2、平瓶1）。人骨。

○対応 曲玉4点と須恵器3点（図9の左側のもの）を差し出すよう指令。後、それらは発見者から寄贈された。

○コメント 博物館が差し出せと指定した須恵器3点には、図を見る限りでは提瓶は含まれてはいないうなのだが、実際に送付された中には提瓶がある。東博の資料は、『島根町誌』⁽²¹⁾、集成、市史に実測図が紹介されている。今日いう龜田北横穴墓群第1支群（龜田横穴墓群北第I支群）の2号穴とされる⁽²²⁾が、記載された規模は必ずしも合致しておらず、疑問は残る。なお、同年の『考古界』誌にこの発見に関する短報が載っている⁽²³⁾。

ところで、この発見については詳しい新聞報道があり、それには「…龜田に至り崖を崩せしに端なくも二個の横穴あるを発見したり驚ろきながら掘進すれば穴中一九個の古代土器物と赤瑪瑙三白瑪瑙一計四個の勾玉あるを発見し直ちにこの旨全村駐在所へ届け出でたるが…先年も今回発見せる場所の上方に於て一個の洞穴あるを発見せし事ありと」（山陰新聞同年4月29日付）とあって、既にこのとき複数穴の横穴墓が認められていたことが分かる。土器の数が合わないとか、上記の資料がすべて同一穴の出土品と言えるのかなど、若干の問題は残る。

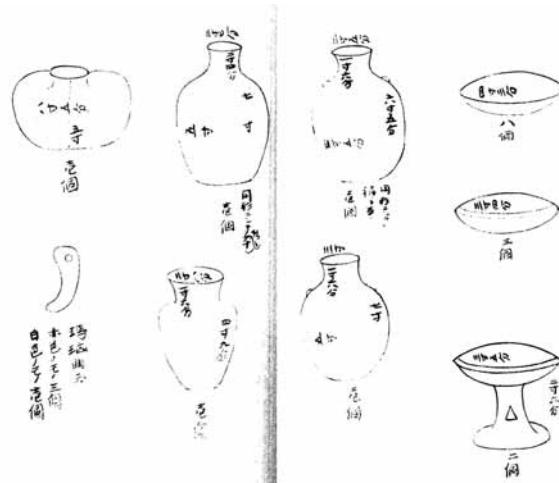


図9

10. 玉湯町玉造（八束郡玉湯村大字玉造）・玉造築山古墳（本村目録86）

および徳連場古墳（本村目録85）

○発見日 1909年（明治42）10月14日

○発見状況 3名の者からそれぞれの所有地で石棺等が発見されたと報告があったが、いずれも約50年前に発掘したものとの再発掘という。そのときは石棺内から曲玉や土器、剣等が出たとの風説があるとする。

○発見品 舟形石棺3、鉄剣1。図10の右二つの石棺が築山古墳、左の石棺と剣が徳連場古墳のもの。

○対応 翌年、玉作湯神社社掌遠藤百衛の名で徳連場出土の鉄剣が東博へ寄贈されている（本村目録84）。この剣は徳連場古墳の土地所有者から神社に奉納され、さらに東博へと寄贈されたものであろう。つまり、本村目録の84と85は、同一物と考えられる。

○コメント 上申文書には、築山古墳の二石棺について「…玉湯村大字玉造字大川小路敷地（俗称築地）地下凡ソ二尺ノ処」と「全所地下凡ソ一尺ノ処」と、出土位置の違いを明記する（なお、「築地」は「築山」の誤りだろう）。さらに、略図（図10）の脇には両者とも「石棺ハ首部ヲ西ニシ東西ニ埋没シアリ」と記す。現今の石棺と比較すると、「首部」とは狭い側のことらしい。次に徳連場古墳に関しては「…大字玉造字徳蓮場山林内地下凡ソ一尺二寸ノ処ニ於テ石棺一個及在中鏽劍壹個発見」とし、

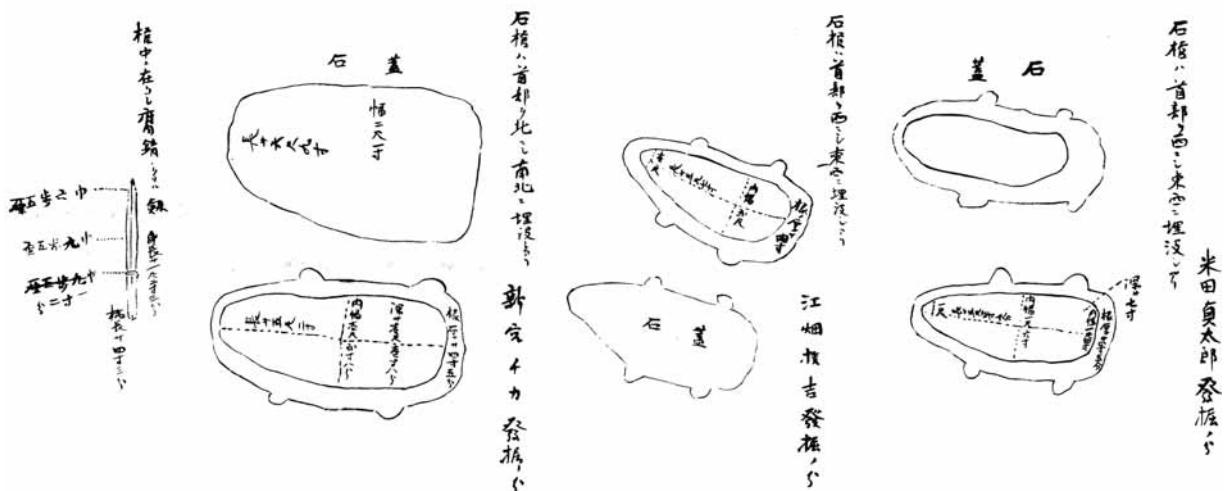


図10

図の脇に「石棺ハ首部ヲ北ニシ南北ニ埋没シアリ」と記す。これは徳連場古墳石棺の現状とは合わない。

著名なこれら2古墳の石棺は、このとき再発掘されたわけであるが、その事情を新聞は当時、次のように報道している。「…八束郡玉湯村ツキヤマの古墳舟形石棺は新聞記事の刺激と遠藤社掌の熱心なる勧誘により去る十三日頭氏子十五六名協力して発掘せしに……右は先年一度発掘して内に存せし勾玉鏡小玉は他に運ばれしなり而して其近傍に尚ほ石棺の存在する見込にて翌十四日は二番氏子十五日は三番氏子を招集して発掘せしに近傍荒神広より又一個の石棺を（内に金属制のものありしと）字トクレハよりも此の石棺（内に鎧刀の折れたるものあり）を発見し湯神社の境内なる荒神広よりは櫛形の玉砥石及び青石等発見せりといふ」（山陰新聞同年9月19日付）。つまり、この再発掘は、玉作湯神社の神職が氏子を動員して行ったものであり、同じ日に3つの石棺が掘り出されたという「偶然」もこれで理解できる。記事にいう「トクレハ」は徳連場のことであろう。なお、その翌年に大野雲外が玉造築山古墳を見学し、『人類学雑誌』に略図を添えて報告している²⁴⁾。

ところで徳連場古墳の石棺は、後に一旦搬出されて再び戻されるという、市史にもふれられている「事件」が起こった。その事情に関して、次の新聞記事があるので紹介しておく。山陰新聞1924年3月5日付に「…玉造の畦地山（畝地山の誤り一引用者）にある有名な舟形石棺（元桑原羊次郎氏が購入して同所の自己の別荘へ持つて行きてゐたが旧跡保存の意味から自発的に発掘地へ返したもの…」と解説されているのがそれである（桑原氏の別荘は現在の玉造温泉駅南にあったという）。市史の記載とはまるでニュアンスが異なっていて戸惑いを覚えるほどである。しかしいずれにせよ、徳連場の石棺の向きが書類と現状とで異なるのは、再設置されたためであると考えることができる。

11. 西谷町（八束郡古江村大字西谷字牛切）・牛切会場古墳（本村目録9）

○発見日 1909年（明治42）11月22日

○発見状況 「山形ヲナセル壱畝拾弐歩ノ小高キ土地」を区内の集会所建設のために地均し工事をしたところ、「地面ヨリ約三尺掘下ゲタル処ニ於テ一間四方ノ大平石アルヲ発見シ其石ヲ取除キタルニ隋円形ノ高サ約七尺ノ石庫ノ如キモノアリ其周囲及下部ハ大小ノ小石ヲ以テ立派ニ築固メアリテ其石庫ノ中」から土器と刀剣類を発見。

○発見品 刀剣破片（「弐口分ナラン」）、刀子破片、破損した土器数点（図11）。

○対応 悉皆博物館に送られたが、腐食の激しい刀剣類は破棄され、須恵器5個（「小付付塙残欠、陶器脚残欠、提瓶、同、壺」各1）が改めて寄贈された。

○コメント 発見された遺構は、その規模から石棺式石室だった可能性が強い。脚付き子持壺を含む東博収蔵の土器4個は集成、市史で紹介されている。博物館へ寄贈分のうち提瓶の一つは、集成では「図化し得ないもの」と扱われているが、それは、添付図のスケッチから鉤形耳のものだったことが分かる。古墳について市史は「一辺約17mあまり、高さ約3.5mの方墳」と推定している。

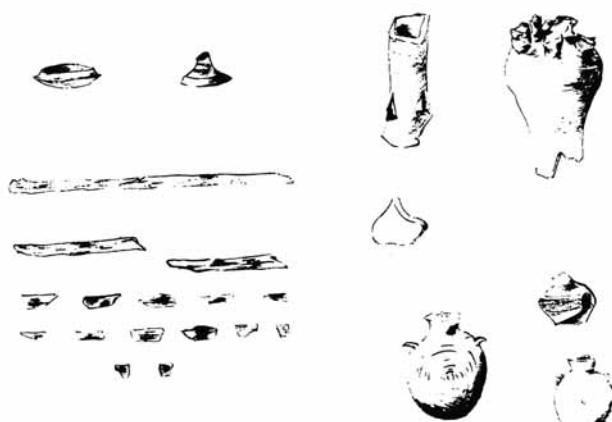


図11

12. 八雲町大石（八東郡熊野村大字大石字松ヶ廻）の発見品（本村目録97）

○発見日 1913年（大正2）3月23日

○発見状況 山林内で土砂採取の際、地下約1丈の所から発見。

○発見品 壺1（図12）。上申の説明は「灰褐色隋円形ニシテ中央部ノ太キ部分周囲二尺七寸廻リ高サ一尺三寸ニシテ上部ニ口径三寸ノロアリ容量約一斗量目約一貫匁アリ」。略図には「壺ノ内外ニ井ノ字型ヲ存ス俗ニ云フ籠焼ノ類ナラン」と付記する。

○対応 「差出スニ及ハス」と回答。

○コメント 本村目録は土器を「土師器壺」とするが、須恵器であろう。「松廻古墳群」として知られている遺跡の一部と考えられるが、詳細不明。



図12

13. 大草町（八東郡大庭村大字大草字杉谷）・古天神古墳（本村目録2）

○発見日 1915年（大正4）8月17日

○発見状況 古天神と称する雑木林にて枯松の根株採掘中に石榔に掘り当たる。

○発見品 刀剣2、土器16、鏡1、金属製環6、鈴様の破片および刀類破片数個。

○対応 「悉皆東京帝室博物館ニ差出スヘシ」と指令。後、「円頭大刀、刀身残欠、提瓶2、甌、高壺、蓋及脚付塙、蓋壺5、五獸鏡、金環3、銀環3、雲珠残片、鐵器残片、埴輪及陶器残片」（数を記さないものはそれぞれ1もしくは一括）に整理し直されて寄贈を受けた。

○コメント 県からの上申書には豊富な挿

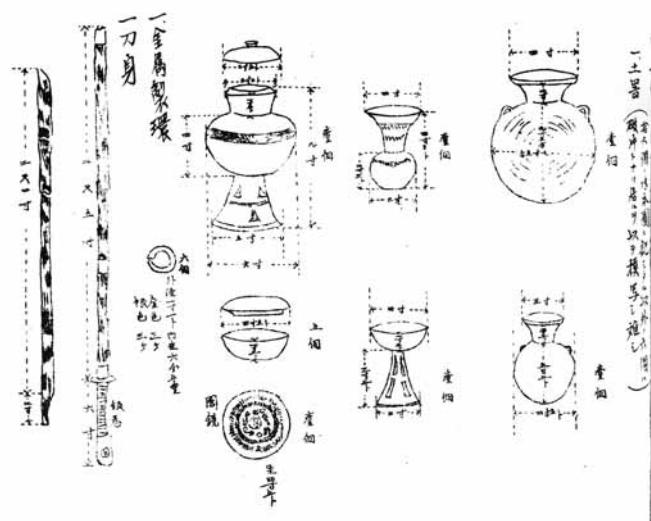


図13-1

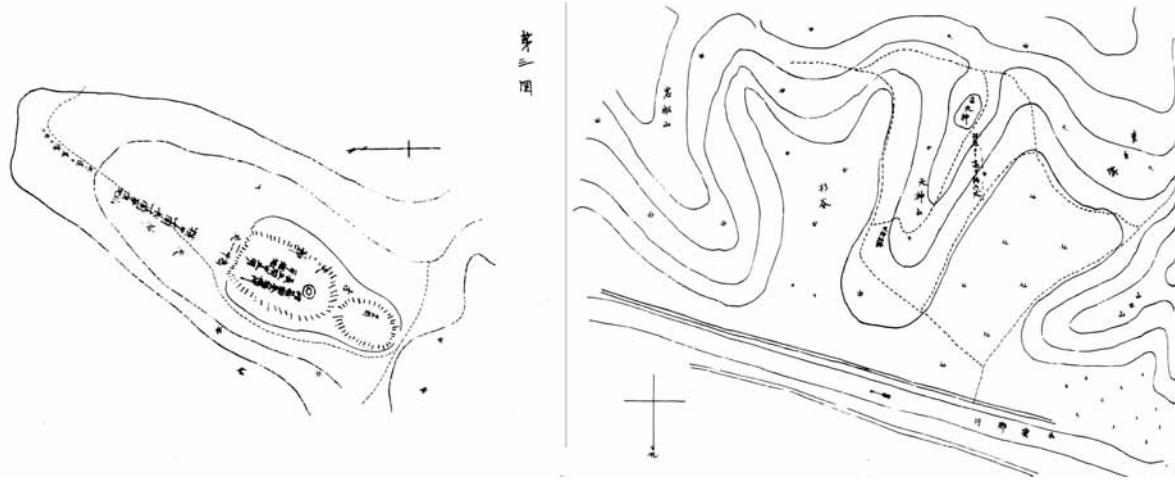


図13-2

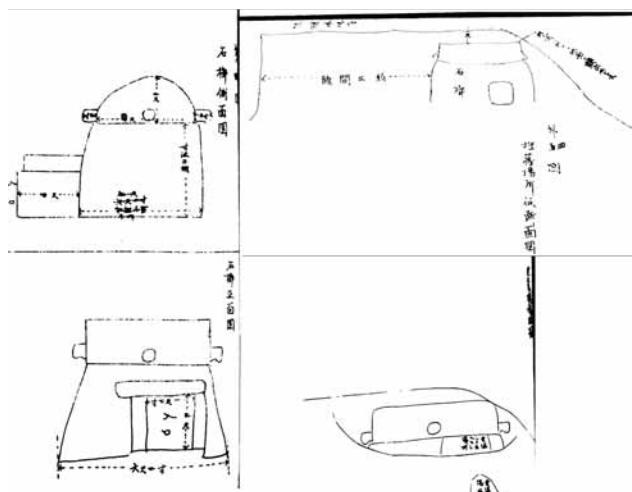


図13-3

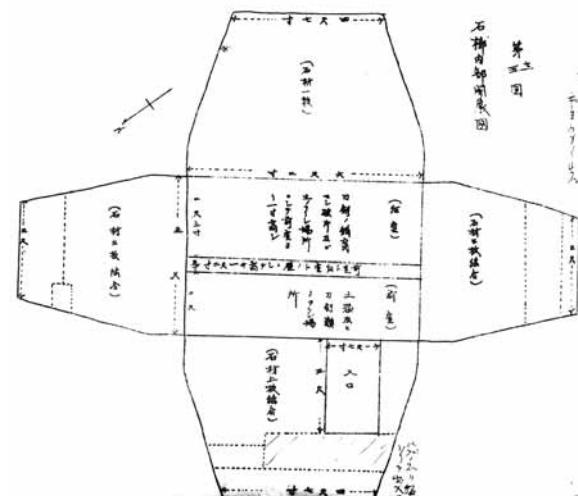


図13-4

図が付されている。図13-1は発見遺物、図13-2は周辺と古墳の地形図（前方後方墳を思わせる図になっていることに注意）、図13-3は石室の各方向からのスケッチ、図13-4は石室展開図である。石室についても「軟質ノ厚サ一尺乃至二尺ノ石材ヲ以テ築造シ西北ニ入口ヲ設ケ其ノ入口ニハ径五寸乃至一尺位ノ無数ノ石ヲ以テ之ヲ覆フ埋蔵物配列ノ模様ハ發掘者ニ於テ遺忘セルヲ以テ不明」と詳しい。この古墳は官内省の関心を惹いたらしく、『埋蔵物録』には外崎覚²⁵⁾による「取調書」が添付されていて、「屋根石の四方に釣手のある」など石室構造の奇異なことが指摘されている。古くから著名な古墳であり、東博所蔵の出土品については山本清氏によって早くに紹介され²⁶⁾、その後各書に図が報告されているが、市史では須恵器について2種類の図を載せている。16個出土したという土器の数は上記した博物館の受領数（収蔵品目録と同じ）と合わない²⁷⁾が、図13-1の土器の説明に「拾六個ノ内本図ニ記シタル以外ノ六個ハ破片トナリ居ルヲ以テ模写シ難シ」とあるのが考慮される。

14. 美保関町森山（八束郡森山村大字森山字小中原〈小中村の誤記〉）の土製支脚

○発見日 1924年（大正13）6月25日

○発見状況 桑畠の地中約1尺4、5寸の地点。博物館からの照会に対し、県は、出土地点をドットした5万分の1地形図「境」図幅および出土地点の土層断面図（図14-1）を添えて、「土地ノ表面ヨ

リ約一尺五寸底ニ
二箇並列（末尾ヲ
北方ニ向ケ）埋藏
シアリシモノニシ
テ土壤ハ上層三寸
位ハ黒土、埋藏箇
所三寸位ハ灰色ニ
シテ其ノ中間一尺
位ハ赤土（粘土）ナリ、「伴出品ナシ」などと回答している。

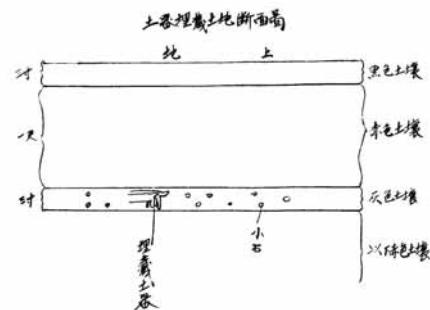


図14-1



図14-2

○発見品 書類では「土製埴輪」（博物館の受領書では「獸形土器」）2。「大、全長六寸五分、足二寸二、三分、胴ノ囲リ七寸五分」「小、全長六寸五分、足二寸二、三分、胴ノ囲リ六寸五分」との説明があり、写真が添付されている（図14-2）。

○対応 県に詳細を照会した後、翌年、「獸形土器」2の寄贈を受けた。

○コメント 当時は性格不明の遺物だった土製支脚の発見記録である。関心を持った博物館が改めて詳細を照会し、それに答えた県が地形図や土層断面図を添付しているのが興味深い。地形図にドットされている地点は小中村の中心地、現国道北側の小平野である。この遺跡は『美保関町誌』にも市史にも記載はないが、小中村遺跡⁽²⁸⁾の一角なのであろう。書類にある「小中原」は「小中村」の誤記と考えられる。なお、本資料は本村目録に見えず、東博の収蔵品目録にも見当たらない。

この資料と関連し問題となるのが、旧『島根県史』にある「森山村大字森山小中村墳穴」である⁽²⁹⁾。同書によれば、これは同じ年の5月に発見されたという横穴墓で、出土品目の中に須恵器類と並んで「犬埴輪」（つまり土製支脚）2というのが挙げられ、附図第六十四ノ一に写真も載っているが、写真を見る限り、これは図14-2の土製支脚と同一物と判断されるのである。従って、「犬埴輪」が伴出したという旧県史の記載は、出土地名や発見年が同じだったことによる混乱・混入と考えられる。

15. 美保関町（八束郡美保関町）美保神社境内の土馬（本村目録96）

○発見日 1921年（大正10）10月10日・11日

○発見状況 社殿改築工事中に「旧本殿敷地玉垣下土中」より出土。

○発見品 土馬2と付属物4。

○対応 上申は1924年になってからなされた。宮内省は「悉皆入用ニ有之候」と指令して送付させたが、翌年、県を介して美保神社宮司横山清丸より「神社

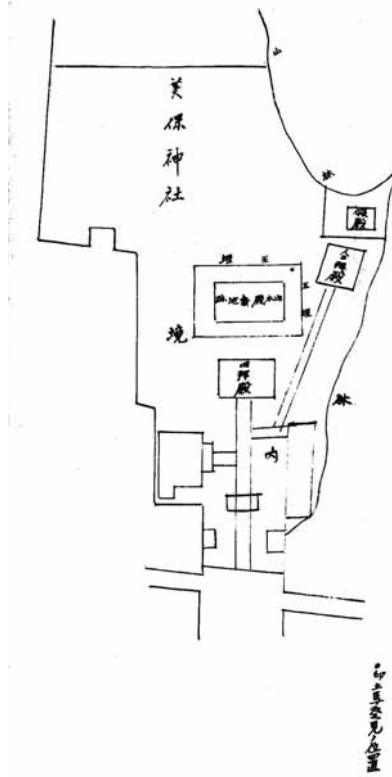


図15-1

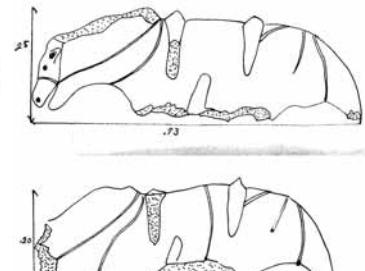


図15-2

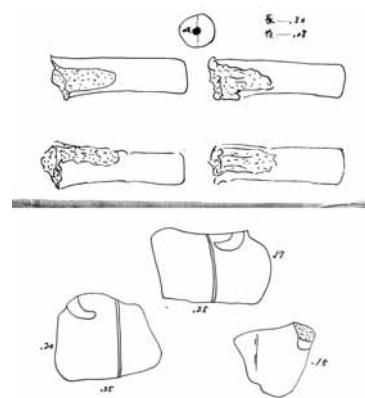


図15-3

境内ヨリ発見セル埋蔵物下戻方ノ件御願」が出され、「右ハ当神社ノ歴史、由来、沿革等ヲ語ル唯一ノ貴重品ニシテ当社ニ取リテハ欠クヘカラサル史料ニ御座候」として、強く返却を願い出た。その結果、土馬 1 が返却され、博物館は「土馬」 1 と「獣形土器破片」 1 （「土器小破片三個附属ス」）を寄贈品として収藏した。

○コメント 上申の書類には出土地点の地図（図15-1）と出土品の略図（図15-2・3）が付いている。この地図によれば、土馬等の出土地点のおおよその特定は、今日でもできるはずである。土馬は接合・復元され、「附属」の土器片および返却された土馬とともに『美保関町誌』に紹介されている⁽³⁰⁾。1995年に美保関町教育委員会が文化財収蔵庫予定地を発掘調査しているが、上記の発見については配慮されていない。

16. 美保関町千酌（八東郡千酌村大字笠浦字青ヶ峰）の石室？（本村目録95）

○発見日 1930年（昭和5）8月3日

○発見状況 山林で畑開墾中、厚さ18cm、幅60cm、高さ1.21mの石材 2 本が「縦二門様ヲ為シ居ル」のを発見し、さらに掘ってみると、「其ノ周囲ニ海中ノ石ト認メラル石材ヲ以テ石垣ヲ築造シアリ」という状況だった。その付近で皿様の土器 1 を発見したが、破壊してしまった。

○発見品 34の破片になった土器 1。

○対応 「差出サルハニ及ハス」と回答。

○コメント 記載からは袖石もしくは門柱石を有する横穴式石室の可能性があるが、それ以上のことは不明。この古墳は『美保関町誌』にもふれられていないが、同じ大字の「笠浦古墳」の名が見える⁽³¹⁾。しかし、発見年を考えると、これとは別物である。

17. 東奥谷町（八東郡法吉村大字奥谷字龜田）・赤崎切通横穴墓群（本村目録5・6・7）

○発見日 近接した所で相次いで3回の発見があった。①1931年（昭和6）6月3日 ②同年6月22日 ③1932年（昭和7）8月15日

○発見状況 ①土砂崩落により発見。②土砂の自然崩壊により発見。③突然の土石崩壊により発見。いずれも偶然の発見としているが、①③の上申には、ここが壁土もしくは土石の採取場となっていたことが記されている。

○発見品 ①添付された「古墳形状図」（図16-1）によるとテント形妻入の横穴墓で、礫敷きがあった。人骨および土器の破片 2。②古墳内には人骨および土器 4 個（添付図（図16-2）によると、壺 2、高壺 1、甌 1）。③「屋根形土堀古墳ニシテ中ニ石棺一個アリ」とするが、図16-3左の絵では、石棺は丘陵の上に移し置かれている。同図では、石棺は横口式のように描かれている。内部に土器 4 個（添付図（図16-4）によると、壺 1、直口壺 2、甌 1）。

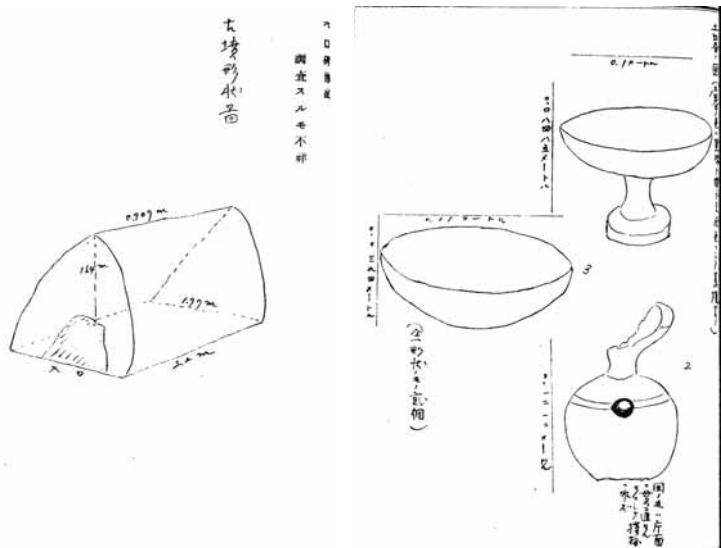


図16-1

図16-2

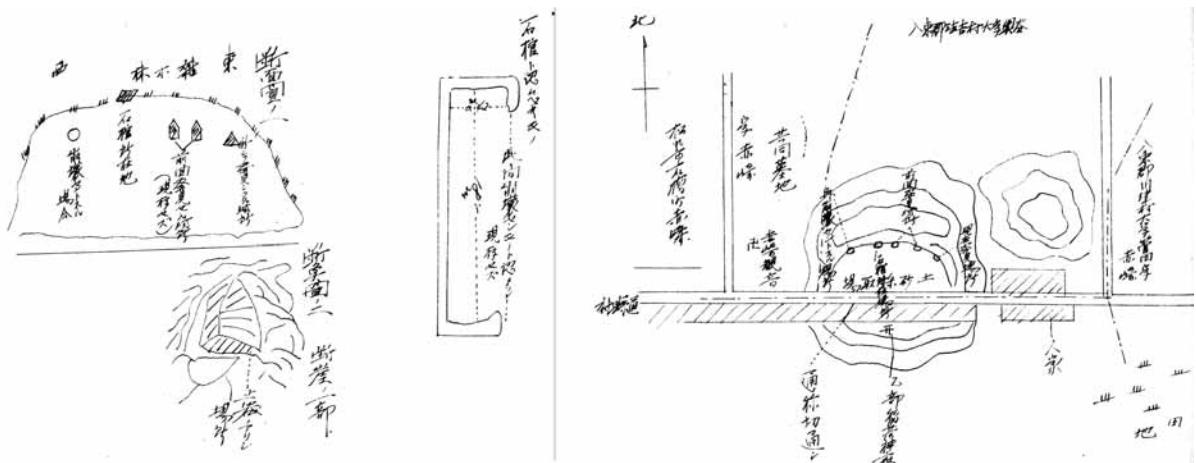


図16-3

○対応 いずれも「差出サルヽニ及ハス」と回答。

○コメント 同一箇所での横穴墓発見が続いた。特に③の報告では詳しい地図や石棺などのスケッチが付されている(図16-3)。ここは北の山塊から伸びた狭い丘陵の南端部で、幕末までに街道を通すために切り通されていたが、その崖面で採土が行われ、その過程で次々と横穴墓が発見されたものである。赤崎切通横穴墓群と呼ばれる遺跡⁽³²⁾の一角であるが、同じ丘陵の北方には菅田横穴墓群などがあり、本来はこれらとともに一大横穴墓群を構成していた可能性がある。現地は今、民家の裏の崖となっている。

18. 八雲町熊野（八束郡熊野村字宮内）・宮内横穴墓（本村目録90）

○発見日 1934年(昭和9)3月25日

○発見状況 熊野神社境内、社殿後方の山林頂上に近い南側で、花崗岩に掘り込んだ横穴を発見。中央高さ1.09m、奥行き1.39m、前壁2.33m、後壁2.30m、底部に約0.3m大の敷石数個あり。

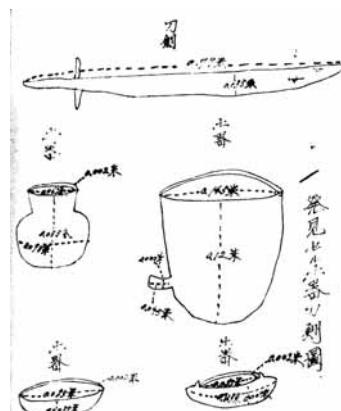
○発見品 須恵器16、土師器1、直刀1。

○対応 全点が官司より博物館へ寄贈された。

○コメント 土器について上申書は「所謂蓋杯ト称スル灰黒色素焼土器十五個」「所謂埴ト称スル灰黒色素焼小壺土器一個」「同上赤褐色ノ壺一個」と詳しく表現しているが、出土品の略図は稚拙である(図17)。出土地は『八雲村の遺跡』に「熊野大社の裏にあたる丘腹に一穴開口している」³³とある宮内横穴墓であろう。山本清考古資料の中に略測図がある「仮称熊野神社裏山横穴」と同じものと考えられる。土器の実測図は集成と市史に掲載されている。なお、この発見に対応する新聞記事が、大阪朝日新聞同年5月6日付の島根版にある。この記事は洞窟の規模と出土品を述べた後、「先住民族の遺跡ではないかと見られてゐる」と結んでいる。また、同紙6月15日付には「…蓋杯素焼十五個、埴（土器）一個、壺一個、直刀一振は今回鑑定を受けるため東京帝室博物館に送付されることになった」という記事も見られる。



図16-4



义 17

19. 山代町団原（八東郡大庭村大字山代字団原）・団原古墳石室の売却運搬

これは遺跡遺物の新発見ではなく、「石棺ト認メラルヽモノ売却運搬ニ関スル件」という県知事名、宮内大臣宛の報告・照会（1940年〈昭和15〉9月21日付）の写しである。

○報告の概要 古墳の土地所有者○○は、「自己ノ耕作スル畠地ニアリシ…古墳ト認ムベキモノヲ松江市寺町古物商金川得助ニ金百七十円ニテ売却シ金川ハ更ニ之ヲ京都市右京区…寺石喜一郎ニ売却シ寺石ハ之ヲ買受クルヤ本年八月五日山陰線馬潟駅ヨリ愛知県笛島駅迄汽車輸送ヲ為シ名古屋市内（目下行先不明ニテ調査中）ヘ運搬シタル事實アルニ付本件措置ニ關シ何分ノ御指揮被仰度此段及伺上申候也」、つまり、どのように措置したらよいか指示を仰ぎたい。

○発見状況 「約二十年前頃迄ハ蓋石ノミ現シ居リシガ其ノ後風雨ノ為ト付近ヲ開墾シタル為漸次石棺ノ大部分ヲ露呈セシモノナリ」、「巨大ナル切石ヲ以テ築造シタル家形蓋附石棺ニシテ内法長サ六尺七寸幅五尺二寸深サ七尺原サ一尺ニテ横ニ縦二尺四寸横一尺八寸ノ穴アリ内面ハ滑ニシテ石質硬キモ外面ハ風化シ石質脆ク壁面ニ模様等ナシ」と状況を記す。さらに、「土地所有者○○ニ對シテハカネテ所轄警察署ヨリ他ヘ売却運搬等ナサヽルヤウ指示シオキタルモ同人ハ竊カニ之ヲ他ヘ売却シタルモノナリ」、「本石棺ハ從來肥料溜トシテ使用シ居リタルモノナリ」と付記する。

○対応 「発掘埋蔵物ハ入用無之ニ付提出ニ及ハス」と回答。

○コメント 『埋蔵物録』に記録された島根県関係最後の情報（従って松江市関係最後の情報）は、埋蔵物の発見ではなく「石室売り飛ばし事件」についての報告であった。夙に梅原末治によって学界に紹介された古墳である³⁴⁾が、石棺式石室の解体、移送という未曾有の状況にあって、県の深い憂慮にもかかわらず国が紋切り型の回答をしている。周知のように、その後石室は名古屋城内に運び込まれ、そこに設置されて、今日に至っている。注目したいのは、上記した県からの報告内容は、かつて名古屋郷土文化会の水谷盛光氏が熱心に調査し明らかにされた話³⁵⁾とはかなり異なっていることである。今となっては真相は究明し難いが、少なくとも、名古屋に運ばれる以前の事情については、上記の報告によって語られるべきではなかろうか。

おわりに

島根県が国に報告した松江市内における古墳発見の記録を見てきた。もちろん、これら以外にも多くの古墳が発見されていたことは、当時の新聞記事などから明らかである。例えば、後に有名になる岡田山1号墳の石室発見は、松江署の警部が現場検証する騒ぎとなって地元紙もかなり大きく取り上げている（山陰新聞1915年4月15日付）が、『埋蔵物録』にはその報告は収められていない。数多くの発見の中から、いかなる基準で上申する遺跡が選ばれたのかはよく分からない。

しかし重要なのは、上申された資料は、東博の前身博物館などにいた、当時まだ少数だった考古学の専門研究者の目には触れていたということである。東京帝室博物館にいた高橋健自が古天神古墳の出土品について書いた論文中に「地方府からの報告」³⁶⁾と記しているのは、本稿の13で紹介した上申書そのものと考えて間違いない。博物館にあった考古学会や東京大学の人類学会に集う研究者たちは、こうした情報を共有していたと考えられる。

さて、明治20年代以降、考古学の専門研究者が遺跡踏査のため来県するようになる。その筆頭はイギリス人のウィリアム・ガウランドで、1887年（明治20）の9月に来松した。恐らくその時に撮影されたと推定される馬潟港の写真が、大英博物館のガウランド・コレクションの中にあることが、最近判明した³⁷⁾。県内における同氏の足跡については、かつて詳しく述べたことがある³⁸⁾ので参考されたい。そしてその翌年の春には、創立間もない人類学会（東京人類学会）の実質的責任者だった帝国大学理科学院（現在

の東京大学理学部）大学院の坪井正五郎が来県する。同氏はその年の東京地学協会の例会で、出雲の古墳にも触れつつ講演をしている⁽³⁹⁾。

これらを嚆矢として、その後、多くの考古学者が来県、来市することになるが、地元にあって情報を集め中央の学会に提供したり、来県する考古学者を案内したり、さらに自ら遺物を蒐集したりするような知識人も、当然生まっていた。彼らは黎明期の日本考古学を地域から支えた恩人である。1901年（明治34）に坪井に松江の情報を寄せた金田楨太郎⁽⁴⁰⁾は理科大学の坪井の後輩（専攻は地質学）であり、当時、島根県第一中学校（現、県立松江北高校）の校長だった。初期においては、こうした「人脉」も活用されたらしい。この他にも考古学に関心を持つ多くの地元知識人がおり、その中には人類学会や考古学会の機関誌に名を残している者もいる。しかし、彼らがどういう人々だったのかは必ずしも明らかになっていない。こうした先覚者の事跡を発掘することも、大きな課題として残されている⁽⁴¹⁾。

〔謝辞〕 資料調査に当たって古谷毅氏のお世話になり、考証に当たっては、岡崎雄二郎、片岡詩子、竹永三男、花谷浩、三宅博士の各氏から有益なご教示を得ました。篤く御礼申しあげます。

注

- (1) 東京国立博物館『東京国立博物館百年史』1973年。157ページ。
- (2) 同上。325-326ページ。
- (3) 時枝務「近代国家と考古学—『埋蔵物録』の考古学史的研究—」『東京国立博物館紀要』第36号、2001年。77-257ページ。
- (4) 本村豪章「古墳時代の基礎研究稿—資料編（I）—」『東京国立博物館紀要』第16号、1981年。9-197ページ。
- (5) 東京国立博物館『収蔵品目録（先史・原史・有史）』1979年。
- (6) 東京国立博物館『東京国立博物館所蔵須恵器集成III（西日本編）』1998年。
- (7) 勝部昭・内川隆志・加藤里美・深澤太郎・加藤元康・新原佑典「東京国立博物館所蔵資料紹介」『松江市史』（史料編2・考古資料）2012年。722-727ページ。
- (8) 東森市良ほか『八雲村の遺跡』八雲村教育委員会、1978年。23ページ。川上昭一『岩屋口横穴墓群』松江市教育委員会、2006年。
- (9) 金田楨太郎「出雲国八束郡の横穴」『東京人類学会雑誌』第17巻第189号、1901年。116ページ。
- (10) 岡崎雄二郎・中尾秀信「松江市八幡宮下横穴墓群」『八雲立つ風土記の丘』No.146、1997年。
- (11) 坪井正五郎「出雲の横穴」『東京人類学会雑誌』第17巻第188号、1901年。77ページ。
- (12) 石井悠ほか『東出雲町誌』1978年。
- (13) 東出雲町教育委員会『東出雲町の遺跡』1988年。
- (14) 野津左馬之助『島根県史』4、1925年。47ページ。
- (15) 東森市良ほか『高野2号横穴発掘調査報告書』八雲村教育委員会、1980年。
- (16) 梅原末治「出雲に於ける特殊古墳（上）」『考古学雑誌』第9巻第3号、1918年。139-141ページ。
- (17) 横山純夫・卜部吉博・平野芳英『岩屋後古墳』島根県教育委員会、1978年。10-12ページ。
- (18) 江南「出雲国大庭の史蹟」『考古界』第2篇第9号、1903年。540ページ。
- (19) 松本岩雄「美保関町の考古資料」『美保関町誌』下巻、1986年。407-408ページ。
- (20) 同上。
- (21) 山本清「野波地区の古墳と古代遺跡」『島根町誌』本編、1987年。
- (22) 同上。56-61ページ。
- (23) 和田千吉「出雲国野波の古墳発掘」『考古界』第8篇第4号、1909年。201ページ。
- (24) 大野雲外「米子旅行記」『人類学雑誌』第28巻第4号、1912年。224-225ページ。
- (25) 外崎覚（とのさき・かく）は著名な漢学者・歴史学者で、宮内省に出仕して陵墓監などを務めた。森鷗外が『渋江抽斎』の中で、「（会って）傾蓋故きが如き念をした」と記している。

- (26) 山本清「古墳」『島根県文化財調査報告書』第五集、1968年。32-36ページ。
- (27) 松本岩雄「古天神古墳測量調査」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告II』(島根県教育委員会、1983年)でも出土品の員数等について検討されているが、土器16個というのは新聞記者が数えた数ではない。
- (28) 森山公民館『もりやま』1986年。29-30ページ。
- (29) 前注(14)『島根県史』4。312ページ。松本岩雄氏によると「女男岩横穴群」のことだという(前注(19)「美保関町の考古資料」424ページ)。
- (30) 前注(19)「美保関町の考古資料」。460ページ。
- (31) 同上。458ページ。
- (32) かつては切通横穴と赤崎横穴に分けられていたが、今は統合されている(市史259ページ、など)。
- (33) 注(8)『八雲村の遺跡』。25ページ。
- (34) 前注(16)「出雲に於ける特殊古墳(上)」。137-139ページ。
- (35) 水谷盛光「隠れた名古屋城の文化財」『名北労基』No.844、1988年。20ページ(なお、この文献で「研究員」と紹介されているのは若き日の筆者である)。次の文献にも紹介があるが、人名等が異なる。西尾克己ほか「团原古墳」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告VI』島根県教育委員会、1989年。26ページ。
- (36) 高橋健自「出雲国八束郡大草古天神山古墳発掘遺物」『考古学雑誌』第9巻第3号、1919年。260ページ。
- (37) 明治大学博物館の忽那敬三氏のご教示による。
- (38) 渡辺貞幸「ガウランド氏と山陰の古墳(上・中・下)」『八雲立つ風土記の丘』Nos. 37, 39, 40、1979・80年。同「東京国立博物館所蔵『出雲国塩冶村古墳石槨石棺図』について」『MUSEUM』第568号、2000年。
- (39) 坪井正五郎「古墳及び塚穴」『東京地学協会報告』第10巻第3号、1888年。3-20ページ。
- (40) 前注(9)および(11)。
- (41) 花谷浩「瓦礫陶拾遺—明治大正期のある好古家の遺産」『島根考古学会誌』第28集、2011年)は、この分野での最近の労作である。

【補注】 本稿で紹介した『埋蔵物録』は、現在は東博資料館でマイクロフィルム版が公開されており、また、詳細な目録が注(3)の時枝論文に付されている。